

鳥取英和女学校と同志社

(同志社女子大学史料室講演会記録 2)

同志社女子大学史料室

はじめに

本年も昨年にひきつづき「同志社女子大学史料室講演会記録」をお届けいたします。

わたくしども同志社女子大学史料室は、1994年10月24日（女子塾京都ホームの開設記念日）に開設されました。その目的は、申すまでもなく、同志社女学校・同志社女子専門学校・同志社女子大学（短期大学部を含む）に関係する歴史的資料を収集・整理・保管して、その歴史に関する研究と教育とに寄与することにあります。

開設記念に催された第1回展示会「創設期の同志社女学校・M. F. デントン遺品」を皮切りとして、今日まで、毎年、新たなテーマで展示会を企画し、同時に、展示会のテーマに関連する講演会を、学内外の講師をお招きして開催してまいりました。

この冊子は、第15回企画展示のテーマ「同志社スピリットと女性たち」に関連する、近藤十郎名誉教授による講演「鳥取英和女学校と同志社」の内容に、講師自らの手で加筆し、評釈を加えられたものであります。

この冊子が、既に刊行のはじまっております「同志社女子大学史料室叢書」とともに、多くの方々に愛読され、研究上、教育上の資料として適切に活用されることを願ってやみません。

2011年3月

同志社女子大学史料室運営委員長
大 島 中 正

鳥取英和女学校と同志社

近 藤 十 郎

はじめに ～峠を越えると雪だった～

2010年1月7日、山陽側は快晴。しかし、峠を越えて山陰側に入ると辺りの景色は一変して雪景色であった。空は鉛色。特急「スーパー白兔」の窓から見える世界は、初めのうちはひらひらと舞う美しい淡雪であったが、間もなくして窓を覆うほどの牡丹雪に変わっていた。鳥取駅に着いた時には、駅前には長靴を履かなければならないほどの積雪であった。この冬は暖冬で雪も少ない、という予報ではあったが、この地方では予報はあくまで「予報」に過ぎない。1月ともなればこの地方では、何日か晴れの日が続いたあと、ある日突然大雪に見舞われたとしても、それは特段に変わったことではない。

厳冬、大雪、多雨、夏のじめじめした蒸し暑さ……、山陰の地は中国山脈を隔てただけで山陽とは気候や自然環境をまったく異にする。自然の生活環境は必ずしも人々にとって住みやすい地方ではない。日本海側の山陰の地を「山陰」と名づけ、気候温暖にして雨も雪も少ない地中海的風土の山陽地方を「山陽」と名づけたのは言い得て妙、というところであろうか。山陰特有の閉鎖性や偏見、他者や隣人に対して容易に心を開かない山陰人の個性やメンタリティー、といった点も、「山陽」人がこれに対面した場合は、ある種の戸惑いが生じたことも否定できないであろう。しかし経験的に言えば、こうした「戸惑い」は、じつは、むしろ「山陰」人の本質を知らない「山陽」人の偏見に過ぎない、と言えるかも知れない。異質な風土や文化は、時として安易な偏見によってすり替えられる危険性がある。こうした現象は、いわば文化の衝突が必然的にもたらす副産物の一つかも知れない。山陰の地、鳥取に欧米文化を象徴するキリスト教の精神や教えが根づくためには、このような風土の違いやメンタリティーの違いを乗り越え、誤った先入観や偏見から解放されることが何よりもまず優先されなければならなかった。

I. なぜ、「鳥取」だったのか？

(i) 「他人の欲せざる所に」

神戸女学院の創立に関わったタルカット (Miss Eliza Talcott) は、大島花子 (神戸英和女学校第6回卒、井深梶之助夫人) の鳥取英和女学校での奉仕について、「他人の欲せざる所へ行く」べき使命を論じた。大島は女史のこの言葉に深く共鳴、鳥取英和女学校開学2年目 (1889年)、教師として山陰の地鳥取に赴いた¹⁾。山陰の地に鉄道が開通したのは、山陰線下りが1911年4月、上り線は翌年3月のことである。山陰線開通まで、阪神地区から鳥取に向かうためには、まず山陽線で上郡まで行き、そこから人力車や馬車で約100キロにも及ぶ山道を3日がかかりで越えなければならなかった。山陰地方で東西交通が比較的便利になったのは、1912年、余部鉄橋の完成を待ってからのことである。

交通の不便さの問題にかえて加えて、鳥取のみならず山陰の地にキリスト教の教育や伝道の拠点を確保するためには、この地に特有かと思われる閉鎖性や排他性、古い習俗への執着や固執といった、人々の精神的、風土的性格の問題にも向き合い、克服する必要があった。たまたま京都から鳥取の地に宣教師として遣わされ、鳥取教会の伝道の働きとともに鳥取英和女学校の教師の一人として奉職していたデントン (Miss Mary Florence Denton) にとっても、鳥取の地に対する印象は、必ずしも好ましいものではなかったらしい。1900年9月、彼女が鳥取からボードに宛てた手紙には、次のような文章が記されている。「私が出合った中でこの教会ほど活気がなく、つめたい教会は知りません。」²⁾彼女の印象は、半ばその通りであったかも知れない。彼女のそれまでの生活環境に加え、日本におけるいわば「山陽的」風土と、地方における「山陰的」風土との違いは、彼女にとって容易に受け入れることのできるようなものでは決してなかったであろう。しかし、私の知る限り、山陰人のもつ気質やメンタリティーの問題も含めて、日本の地方の文化的、風土的性格は、必ずしも単なる表面的な「第一印象」では推し量れない部分があることも確かである。山陰の人々の心の温かさ、もてなしの精神の豊かさ、人柄の誠実さといった点については、山陽人とは別な意味での味わいがあることを銘記しておかなければならない。明治期の教会創設時以来、教会はもちろんおしなべて鳥取人は、決して「活気なく、冷たい」人々ではなかったし、教会に集まった当時の人々の信仰的情熱がどれほど豊かで活気溢れたものであったかを示す根拠は、当時の教会史を紐解けば十分すぎるほどある。

(ii) 地方伝道への取り組み

山陰の地は、当時のキリスト教伝道活動において、越後や北陸と並んで最も伝道困難な地方として数えられていた。しかし、多くの宣教師たちをはじめ、牧会伝道を志した初期の伝道者たちは率先して、敢えてこうした伝道困難な地方へと自発的、能動的に遣わされていったのである。鳥取教会の創立は1890年1月のことであった。鳥取は、県庁所在地であり、当時の人口は2万8千、現在でも「小京都」と呼ばれる風光明媚な落ち着いた町である。この地を山陰伝道の拠点とすることは、当時の宣教師たちや伝道者たちにとって、福音を地方に土着させるための可能性という点で、選ばれるにふさわしい場所でもあったと思われる。しかし、それが宣教の拠点づくりの最大の理由だったわけでは必ずしもない。鳥取教会を拠点として始まった宣教活動は、そこから東西に繋がる辺地へと拡大されていったが、宣教や伝道活動を担った人々の思いは一つであった。活動の収穫や可能性、有効性といった点は、これらの人々にとっては、あくまで二次的なものに過ぎなかったのである。1911年の「ミッション・ニュース」の報告には、鳥取を拠点とする山陰伝道の足跡の一端を偲ばせる次のような一文がある。

「但馬地区は、鳥取から京都に向かって17時間ほど戻ったところ。そこへ行く不便さは、この上ない。鳥取から法外な値段の人力車で35マイル行き、更に人力車も入れないような所を10マイルほど歩く。交通手段はお粗末なものだが、行き先に、私たちを待ちわびる人々と村々があることだ。…（後略）…」³⁾

「行く先に、私たちを待ちわびる人々と村々があること」……この一事が、日本人伝道者たちをも含めて当時の多くの宣教師たちを、宣教の旅へと押し出した原動力であった。彼らは、宣教の働きのために何らの条件も付けなかった。旧来の社会のしがらみや古い因習から人びとを解放し、時代の閉塞性を打ち破り、個々人が神の前に平等な人格的存在として認められる新しい歴史の可能性を示す、という、そこにこそ彼らの宣教の基本的課題があった。明治期の新しい時代の夜明けを迎えて、そのためにキリスト教の精神が重要な貢献を果たしうる、と彼らは信じていたのである。

Ⅱ．鳥取英和女学校設立の経緯

(i) 鳥取教会と鳥取英和女学校

鳥取におけるキリスト教伝道の経緯を考える場合、明治期の宣教師たちや日本人伝道者たちの宣教の姿勢と方法には、ある種の共通点が認められる。すなわち、伝道（福音宣教）と教育啓蒙活動の一体化、バランスという点がこれである。鳥取の地において「友愛会」が発足したのは、英和女学校設立に先立つこと5年前の1882年のことであった。この年来鳥した綱島佳吉牧師によって、キリスト教の教えに共鳴する求道者の団体としてこの会が発足した。これが後の鳥取教会の萌芽となったと言われている。間もなくして「毛糸編物講習会」が発足、編み物実習と聖書研究会が並行して行われ、1887年4月からは英語教室もスタート、これらを基礎として同年9月、鳥取英和女学校が始まるのである。

鳥取におけるプロテスタント伝道は、これらに先立つこと10年も以前、1879年、同志社英学校の第1回卒業生にして卒業と同時に同志社女学校に就任した加藤勇次郎が、同窓後輩の鳥取からの生徒であった吉田秀蔵の招きによって鳥取伝道を行ったことが始まり、と伝えられている⁴⁾。

翌1880年、デフォレスト宣教師 (John K. H. DeForest)、上代知新牧師が来鳥してキリスト教演説会を開催、1885年には、デフォレストと共に馬場種太郎、O. ケーリ (Otis Cary)、金森通倫等が来鳥して演説会を開催して、多数の聴衆を集めた。このような流れの中で同年、上代牧師がアメリカン・ボードから鳥取地区の常駐伝道者として派遣された。この頃タルカットも岡山の地から度々鳥取の地を訪れ、宣教活動に携わった。彼女がこの地における英語教室のために重要な働きを担ったことは、言うまでもなからう。

(ii) 鳥取英和女学校設立の動機と流れ

(a) 先駆者タルカット

タルカットは1873年来日、その時すでに37歳であった。彼女はダッドレー (Miss Julia Dudley) と共に、1875年10月12日、「女学校」(The Girls' School) を開設する。これは後に「英和女学校」、その後「神戸英和女学校」と改称された。現神戸女学院の前身である。1877年にはクラークソン (Miss Virginia A. Clarkson) 来日着任、前任者と共に奉職したが、タルカットらとの間に学校経営の方針をめぐる意見の齟齬が生じた。タルカットは学校を去り、「本来

の任務である伝道に専念するために」岡山・京都を中心に宣教活動に携わった。当時、日本の伝道圏は拡大されて山陰や山陽地方の各地に及んでおり、岡山がそれらの地方の拠点となっていた。1879年4月から、これらの諸地域では、伝道活動はひとり教会設立運動のみに留まらず、むしろ医療・教育活動が先行する形で進められていた。ペリー (John Cuting Berry) は医療活動、ペティー (James H. Pettee)、ケーリ夫妻、ウィルソン (Miss Julia Wilson) らは教育活動に力を注いだ。タルカットが岡山に転じたのは、ウィルソンが病を得て帰国したための補充人事だったようである⁵⁾。

タルカットが鳥取の地に入って、他の日本人牧師たちや他の協力者たちと共に鳥取英和女学校を開設したのは1887年9月7日のことであるが、この女学校の開設は、鳥取教会設立に先立つ3年も前のことであった。鳥取教会設立への機運は、この時期鳥取伝道に邁進した数多くの人々によるキリスト教演説会、友愛会や英語教室の働きによっていや増しに高まっていた。当時説教所に集まった人々のうち、男性の半分は若年層、女性の大部分は英和女学校の生徒であった、と『鳥取教会百年史』は記している⁶⁾。英和女学校が鳥取教会設立への礎石の役割を果たした、ということは疑いないところである。

(b) 協力者たち

鳥取英和女学校設立の発起人は、記録によれば尾崎又次郎、上島伝次郎、岡垣春六の3氏であり、いずれも当時の熱心な信徒たちであった⁷⁾。設立に当たっての発起人代表は上代知新牧師、校主はタルカット、幹事(後に校長)には井伊松蔵牧師、その他岡垣春六も加わり、多数の婦人(女性)宣教師たちもこの聖業に協力の手を惜しまなかった。教師陣には、鳥取出身で同志社女学校第5回本科卒業生の高田(能勢)ミチ、同じく鳥取出身の高宮操、津山出身の井上さき、といった人々が迎えられた。

Ⅲ. 鳥取英和女学校の15年

(i) 設立の目的と趣旨

1887年6月11日付『鳥取新報』に発表された「鳥取英和女学校設立の趣旨」には、この女学校を設立するに当たっての基本理念が明確に表されている。創設にあたった人々が、この女学校の設立を単にキリスト教の布教活動のための伏線、有効な補助器官的な施設としては位置づけていなかったことが明白であ

る。この女学校の開設が、3年後の鳥取教会の創立の下地になったことは言うまでもないが、建学の精神そのものが後の鳥取教会の福音宣教の中味を整えるのに重要な柱となったことも銘記しておくべきである。教会は、福音宣教の働きと同時に、教育の分野において、鳥取の風土や文化に巧みに融和しつつも、地域に新しい時代の潮流をつくるために、独自の貢献を果たすことになったのである。鳥取教会の福音宣教の歴史を繙くにあたっては、この事実を抜きにして語ることはできない。

「……然り而シテ、男女は車ノ両輪、禽ノ雙翼ノ如シ。然レトモ、東洋從來の教育ハ、男女各其方ヲ區別シ、婦女子ヲ教フルヤ、只三従ヲ守ルヲ以テ貞操ノ美德トナシ、其智識ヲ鍛鍊シ道德ヲ補翼スルノ道ニ至リテハ、未タ嘗テ之ヲ講セス。……夫レ真正ノ婦人ハ、温良恭謙ノ婦徳ヲ備ヘ、其智識才能正ニ男子ニ劣ラス。然レハ、才子淑女ト其智徳ヲ同フシ、精神ヲ与ニシ、社会ノ公益ヲ佑クルハ、造物主ノ定メ玉フノ神則ト云可シ。……」⁸⁾

文中「三従ヲ守ル」の「三従」とは、女性に従わなければならない三つの教えること。すなわち、家にあっては父に、嫁しては夫に、夫に死に別れた後は子に従うべし、との教えである。これが「貞操ノ美德」として女性の生き方を律する社会的通念であった。城下町鳥取において、女性であるがゆえに謂わば「運命づけられていた」このような社会的通念に対して、真っ向から挑もうとする姿勢が、「設立の趣意」には明確に述べられている。これが鳥取英和女学校の設立の基本理念として付けに訴えられたことは、当時なお古い価値観、女性観を脱却しきれていなかった鳥取の地においてはまさに画期的なことであった。男女平等の理念を設立の趣意の冒頭に打ち出して教育の原点に据えるといった、当時の鳥取の社会には無謀とも言える挑戦を、女学校や教会の設立に当たって、人々は果敢になしたのである。英和女学校における教育は、「女性にも教育を」「女性にも職業教育を」といった単なる啓蒙教育の如きものではなかった。男性であろうと女性であろうと、時流に流されることなく、古い伝統や価値観におもねることもなく、それぞれの能力や個性を生かしながら、「社会ノ公益ヲ佑クル」ことのできる人間として貢献すること、これが「造物主ノ定メ玉フ神則」だ、というのである。神戸英和女学校をはじめ、当時日本の各地に創設されたキリスト教主義の女学校の教育方針は、多かれ少なかれこのような確固

たる教育理念によって裏打ちされたものであった。女学校の設立という事業そのものが、当時の日本の社会において新しい女性観の確立を目指した点、その功績は大きい、単にそればかりではなく、これらが日本の教育史、精神的風土史において新しい時代の潮流をつくるための先駆けとしての意味を多分に持っていた、ということも特記しておかなければならない。

(ii) 優れた教師陣、充実した教育内容

教育は人である、とは言い得て妙である。山陰の地鳥取にこれほど多くの人びと、宣教師たちをはじめ日本人の牧師、教師たちが、集中的に伝道と教育のために祈り、働いたという事実はまさに驚嘆に値する。山陰という地の利のなさ、明治初期の謂わば遮断された文化的背景や基盤、古い因習や旧来の価値観に縛られた地方人にありがちな頑迷さ、といったマイナス要因が渦巻く中に、人びとは敢えてキリストの福音を旗印に掲げて飛び込んだ。

創設時の校主タルカット以外に、鳥取英和女学校の教育に携わった宣教師たちのリストを、『鳥取教会百年史Ⅱ』の資料を借りて、次に掲げておく。

(a) 宣教師たちのリスト (一部)

Mr. & Mrs. G. M. Roland 在任期間 1890～1895年

1893年5月23日付のアメリカン・ボードへの報告書“Evangelistic Work”に鳥取からの通信が記載されている。(『アメリカンボード宣教師文書資料一覧1869～1896』同志社大学人文科学研究所、マイクロフィルム Roll 19, No.30)

Mr. Severance 在任期間 1890～1892年

Miss M. A. Holbrook 在任期間 1890～1891年

Miss C. A. Stone 在任期間 1890年

Miss A. Gill 在任期間 1891～1892年

Miss M. A. Daughaday 在任期間 1892～1894年

“Report of Work in Tottori for 1892”というボストンの本部への報告書が、ローランド宣教師の報告書と共に同じ日付で提出されている(Roll No.29)。さらに、“Tottori Annual Report, 1893～1894”という年度報告もなされている(Roll No.52)。ただし、日付は明記されていない。

Mr. & Mrs. S. C. Bartlett	在任期間	1894～1904年
Miss M. F. Denton	在任期間	1899～1900年
Mr. & Mrs. H. J. Bennett	在任期間	1901～1939年
Miss E. L. Coe	在任期間	1916～1930年

(b) 日本人教師のリスト

高田(能勢)ミチ(道)	前出
高 宮 操	前出
井 上 さ き	前出
大 島 花 子	前出

井深梶之助夫人、後にマウント・ホリヨーク・カレッジに留学。

濱 田 知 亀

同志社女学校1892年卒。卒後同校に勤務したが、『同志社女学校期報』(以下、『期報』と略記する)第3号(1895年1月)に、「(1894年)9月因州鳥取に赴き神戸女学院卒業生河越氏と共に鳥取英和女学校のために専ら尽力」との消息記事がある(p.6)。

緒方(玉野) 幸

熊本女学校を卒業後、同志社女学校に学び、同校卒業後鳥取英和女学校教師として赴任(『同志社女子大学125年』p.64)。

伊 藤 珍 枝	編み物教師
住 谷 子 梅	編み物教師
大 野 竹 草 夫人	
内 田 正	鳥取教会初代牧師
井 伊 松 蔵	鳥取教会第4代牧師

1887年8月22日付『鳥取新報』には、「鳥取英和女学校規則」が掲載されている。募集定員は約50名、修学年限は4カ年、入学時の年齢満12歳以上、教科内容は、英学、米国史、英国史、物理学、化学、心理学、数学、地理学、歴史、家事、習字・作文等が列举され実に広汎多彩である。規則の第1項には「智徳兼備の女子を養成する所とす」とあるが、この場合の「智徳兼備の女子」という言葉の意味合いは、まさに今日のリベラル・アーツの精神を先取りしたものであり、当時の教育、とりわけ女子教育という課題に、当時の人々がどれほど

先鋭的な取り組みを試みたかを窺わせるものである。

(iii) 教職員・生徒数の推移

15年間の英和女学校の歴史の中で、入学者数が定員の50名を上回ったことは、残念ながら一度もなかった。鳥取英和女学校15年の歴史に加わった教職員、生徒数の推移を次に掲げておく。

年 号	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	'98	'99	'00	'01
教員数	4	3	5	14	6	—	6	5	6	8	7	7	6	6	6
生徒数	33	45	48	47	45	—	25	27	26	31	29	38	41	37	37

『鳥取県統計書』による。年号は西暦に改め、下2桁のみ表示した。

平均値は、在籍生徒数36.4名、教師数6.4名である。但し、空欄のため実数が不明の1892年を省いている。この年はなんらかの理由で届け出がなされなかったものと思われる。

1890年は生徒数が横ばいであるにも拘わらず教師数が3倍近くにもなっている。その理由は正確には分からない。しかし、その年の1月23日には鳥取教会が創設され、そのための精神的な支柱の一つであった英和女学校への思い入れが、当時の人々の信仰的熱気として実現されたことも影響したかも知れない。統計表に表れているように、1893年から1896年にかけては、生徒数はかなり急激に減少している。それでなくても経営困難な状況にあって、英和女学校におけるこの生徒数減少がもたらした困難はまことに厳しいものであったであろう。1901年の閉校時の在籍生徒数は37名であるが、閉校が決まってから残されたこれらの生徒たちが、その後どのような歩みや進路を辿ったのかについては、今後さらに実証的な研究を待たなければならない。

(iv) 学校運営を妨げた要因

(a) 国家主義の台頭、保守反動の歴史の流れ

多くの人々の献身的な努力にも拘わらず、学校運営が蹉跌に直面せざるを得なかった要因はどこにあったのだろうか。明らかな理由の一つは、当時のわが国の時勢がキリスト教主義教育を標榜する諸学校の歩みに対してマイナスに作用したことであろう。国家主義の台頭、保守反動の時の流れは、明治の開明派、洋学派の人々による男女平等の思想、とりわけ女子教育への取り組みに基礎を

置く新時代への祈りや期待に対して、儒教の精神に基づく復古主義の鼓舞へと次第にその方向性をきめる傾向にあった。前述した「三従」の教え、それに基づく家庭婦人の養成、忠君愛国の思想等が、自由平等の思想を押し戻す形で歴史の流れを形成することになった。教育は、こうした歴史形成の流れを定めるために為政者たちによって都合よく利用される誘惑と危険性に満ちていた。1889年2月11日「大日本帝国憲法」発布、続いて翌1890年には「教育勅語」が公けにされている。内村鑑三の「不敬事件」は、1891年1月に起きている。

1892年の『鳥取県知事事務引継書』には、次のような文章が掲載されている。

此校タルヤ宗教ニ誘導スルノ傾キアリテ、他ノ学校トハ其趣旨ヲ異ニスルヲ以テ、或ハ国家主義ニ悖ルノ虞レニヨリ、常ニ深ク注意セリ。…」⁹⁾

先の教職員・生徒数の欄が、1892年の分が欠落しているのは、当時の所轄官庁のこうした姿勢とあながち無関係ではないであろう。この一事だけを見ても、当時の英和女学校関係者たちが体験した苦渋や苦難がいかなるものであったかを察することができる。キリスト教主義の建学の精神を堅持しようとするのがゆえに、敢えて所轄官庁、ひいては国家と対峙せざるを得なかった当時の人びとの労苦を改めて知らされる思いがする。

同じような事例は、当時のキリスト教主義学校において共通して認められた出来事であった。神戸女学院創立25年の記念式典において、当時の兵庫県師範学校校長の長松貞次郎は、次のような演説をしている。記念式典に来賓の一人として招かれた彼は、本来ならば「祝辞」をこそ述べるべき位置にあったのである。

「……しかりといえども神を第一の至尊に置くは大いに我が国の国民教育の本旨と反馳するものなきを得ず。我が国は万世一系の帝室をいただきおれり。この帝室こそすなわち諸仏の上位に位したまい、一国すべての権力を握らせたまうにあり、世界の人道を基として我が普通教育をも立ちおれり。…（中略）…忠孝の大義を知らしめ、人道の運命を悟らしむるは教育の本旨なり。…（後略）…」¹⁰⁾

「教育の本旨」は、「忠孝の大義を知らしめ、人道の運命を悟らしむる」こ

とだ、というわけである。神戸女学院の創設は1875年であるから、創立25周年は1900年に当たる。鳥取英和女学校の閉校1年前のことである。

(b) 「鳥取女学校」の開設と鳥取英和女学校

鳥取英和女学校にとって、さらに難しい問題は、いわば「ライバル校」の出現であった。英和女学校設立の翌年には「鳥取女学校」が半ば公けの支援を受ける形で設立されている。キリスト教主義女学校の設立が、この地の旧来の勢力から反発を受けたことは十分に考えられるところである。「鳥取女学校」設立の母体は、地域の各界の知名人の夫人たちによって組織されていた「鳥取婦人会」であった。この女学校の発起人は、妹尾三子ほか3名。当時の鳥取婦人会の会長松村キカは、鳥取師範学校（後の鳥取大学教育学部）校長夫人であった。1888年創設の「鳥取女学校」における最初の入学者は期待されたほど多くはなく、24名の少数であった。女性に高等教育を、という意識は当時それほど一般的ではなかったことを意味するものであろうか。この学校では、旧来の良妻賢母型の女子教育が標榜されたことはいままでもない。学校運営も英和女学校とは違って時代の流れに乗ったこともあり、比較的順調に進められたようである。1897年には、「鳥取女学校」から「鳥取市立高等女学校」となり、さらに県立高等女学校へと発展した（現・鳥取西高等学校）。これに対して鳥取英和女学校はあくまで私立の学校であり、その教育の根幹をキリスト教の信仰に基づく人格の陶冶に置く学校である。その理想や良し、しかし学校の経営基盤はまことに脆弱そのものであった。しかし、数々の困難にも拘わらず、学校運営に携わった人々は安易に歴史の流れに身を任せることはせず、体制のあり方に迎合することもなかったのである。

IV. 鳥取英和女学校と同志社、とりわけ同志社女学校とのかかわり

以下、同志社女学校との関連をも含め、鳥取英和女学校の15年の校史に登場した人物像を中心に考察してみる。

(i) 同志社女学校の卒業生たち

(a) 高田（能勢）みち（ミチ、道）の場合

高田ミチの名前は、1887年、明治20年8月22日付『鳥取新報』に掲載された「鳥取英和女学校規則」の末尾に、「亦た同校にては高田ミチ女史を教師に招

聘し外に二名の助手を置く都合なりと云ふ。」とある。¹¹⁾ 同志社女学校卒業生の一人、田中竹は、同志社の歴史の中で「明治18年事件」と言われている同志社女学校存亡の危機にあたって、当時の生徒たちがみずから立ち上がってこの危機を乗り越えるための重要な働きを果たしたことについてこのように記録している。すなわち、

「時に同校卒業生生徒側から、一回生高松せん様、山崎春代様、三回生高田みち様が憤然と起て再興に努力し、力のあらん限りを尽くした結果、京都市紳士中島末治氏、大沢善助氏、中村栄助氏等が其熱誠に感服して、西洋人の手より京都紳士の手に同志社女学校を引き取り、辛うじて同校の生命は救はれました。」¹²⁾

文中にある女学校第3回生の高田ミチは、鳥取の出身、同志社女学校第5回本科卒業生の一人である。彼女は、鳥取県立女子師範学校に学び、卒業後は地元の遷喬小学校の訓導として奉職していたが、その職を辞して同志社女学校に入学、ラーネッド (Dwight Whitney Learned) より受洗、卒業と同時に鳥取英和女学校の教師として赴任して主任教師となった。2年後には京都に戻り、同志社女学校の舎監を務めた。後実業家の能勢安次郎と結婚、三男一女をもうけたが、42歳の若さで召されている。彼女は同窓会会長（初代会長：1893年～1894年）も務めた。『期報』第3号に掲載された森脇いと子の「夏期伝道報告」は、高田の故郷伝道と鳥取英和学校の教師としての働きのために同志社の同窓生たちが祈りを合わせて支えてほしい、と訴えている。

「……以上は鳥取教会夏期伝道の概況なるが、尚別に諸愛姉に紹介して同情を得まほしきもの有り。そは此教会と密接なる関係を有する英和女学校の事なり。此女学校はもと当同窓会委員長たる能勢道子の尽力にて明治十九年創設せられしものにして、此度又同窓会員なる濱田ちき子と神戸女学校出身の一姉と働らかるゝことゝなりたれど、前にも陳べしが如き地方のことゆゑ困難も多かるべく、……諸愛姉の之を祈祷の端に加へ給はんことを祈りて止まず。……」¹³⁾

(b) 松田幸の場合

松田は、1894年、同志社女学校普通科を卒業してデントンと共に鳥取に赴き、パートレット (Samuel Bartlett) 宣教師夫妻を助けている。1898年には渡米、3年間アメリカに学び、さらに4年間にわたってドイツでピアノを学んでいる。帰国後華族女学校でピアノ教師として勤めた。

(c) 濱田知亀 (ちき) の場合

濱田は熊本県の出身。1892年同志社女学校第9回の卒業生である。『期報』には、次のような記事が掲載されている。

「思ふ処ありて去九月因州鳥取に赴き、神戸女学院卒業生川越氏と共に鳥取〔英和〕女学校のために専ら尽力せらるゝ事となれり。教授時間の如きは一週三十時間に近きよし、以て姉が働の一斑を窺ふに足る。かつ姉等赴任後、新に文学会及び同窓会等を組織し、新旧協力して同校の隆盛を計らるゝ由。」¹⁴⁾

(ii) 鳥取英和女学校の卒業生たち

(a) 尾崎あや (章) の場合

鳥取英和女学校第1回卒業生のひとりである。『鳥取教会七十年史』に、彼女自身の回想録が残されている。17歳で鳥取教会初代牧師の内田正牧師から受洗している。19歳の時尾崎信太郎と結婚。夫と共に創設期の鳥取教会の宣教の働きに邁進する。尾崎は、留岡幸助、石井十次らの感化を受け、鳥取孤児院を創設した。たまたま鳥取英和女学校が閉校になったので、その跡地が利用されたのである。鳥取孤児院は、その後「鳥取こども学園」として創設者の祈りを継承し、鳥取教会における伝道活動を福祉の分野から実践する場として、地域の福祉の課題に現在も精力的に取り組んでいる。尾崎信太郎の遺志は子息の尾崎悌之助からその子息良一へ、良一召天後は、その夫人の倅子が現理事長としてその職責を引き継いでいる。信太郎の曾孫の尾崎信一郎は鳥取教会員で、鳥取県立博物館副館長の要職にある。

(b) 森脇 (西川) いと [糸] の場合

森脇いとは、鳥取英和女学校の卒業生の一人である。村部芳と共に卒業後同

同志社女学校に学ぶ。同志社女学校在学中、出身地の鳥取に夏期伝道に派遣され、精力的に仕事をこなした。当時未だ二十歳代前半の若さ、一介の女子学徒にすぎなかったが、『期報』に掲載された彼女の「夏期伝道報告」が示すとおり、その言じつに信仰の気概溢れたものになっている。

……伝道師たるものハ、父母たり教師たり参謀官たり指令官たるの資格を養ハざるべからざるなり。然るを況んや、我等の如き由来狹隘なる天地に起臥し、いと経験に貧づき学生の、如何でか此任務を全ふするを得べき、実に此心靈上の聖職を汚さんこと、恐れ多さの限にして戦慄の外なきなり。…（中略）…指定の場所ハ、山陰の第二の都会と称せられながら四囲の峯巒の高さが為に其名世上に埋れたる因州の鳥取市なり。此市ハもと余の生国なれば、預言者云々の句も想ひだされて、少しは疑を抱きつゝ七月三日の午後終に汽車を西に取りぬ」¹⁵⁾

故郷鳥取の地での、彼女の働きは、彼女にとってまさに、故郷伝道に命を賭ける預言者のようなものとして自覚されていたことが読み取れよう。

（c）森脇みどりの場合

鳥取教会創設期の中心人物の一人であった森脇竹蔵の夫人。竹蔵は同志社英文科の卒業で、1887年上代知新牧師より洗礼を受けた。尾崎信太郎は彼の従兄弟にあたる。共に鳥取教会の創設に尽力した。後に鳥取市会議員を務めた。

（d）有田とし（敏）の場合

鳥取英和女学校の最終回の卒業生の一人である。『鳥取教会七十年史』には、彼女自身の回想録が残されていて興味深い。英和女学校の閉校記念写真には、校長で第4代鳥取教会牧師の井伊松蔵、バートレット夫人、次に掲げる井上松代、石上（政田）たか等の顔も見える。有田が英和女学校に入学したのは、彼女が弱冠11歳の時、22歳になってからベネット（Henry J. Bennett）宣教師から洗礼を受けた。その後神戸女学院に学び、同校普通部（第27回）を卒業、さらに音楽部オルガン師範科（第37回）を修めて、母校神戸女学院の教師として奉職した（1911年～1935年）。

(e) 井上松代の場合

鳥取英和女学校においてデントンに学ぶ。後に同志社女学校に進んで研鑽を続けた。『ミス・デントン』には、彼女の回想録の一部が収録されている。¹⁶⁾

(f) 石上(政田)たかの場合

20歳から3年間、鳥取英和女学校に学ぶ。23歳のときバートレット宣教師から受洗。子息の政田二郎は後代、他の人々と共に鳥取教会の歴史に重要な役割を担い、『鳥取教会七十年史』の発刊に際しては編集委員の一人として尽力した。

その他、鳥取英和女学校の卒業生たちの中から、牧師夫人として夫と共に教会の宣教活動に共同の働きを担った人びと、社会に大きな貢献を果たした人びとの名をあげるとすれば、枚挙に暇がない。林りきは砂川竹蔵牧師夫人、織田ますは米沢尚三牧師夫人、田辺すがは釘宮辰生牧師夫人、四宮とめは中江汪牧師夫人、内野たつは鳥取教会第3代牧師・剣持省吾牧師夫人、西尾よねは第4代牧師・井伊松蔵牧師(英和女学校長でもある)夫人となって夫松蔵と人生の苦楽を共にした。彼女は同志社女学校普通科(1897年)を卒業している。

V. 鳥取英和女学校の終焉とその後

(i) 「文部省訓令第12号」の意味したもの

1899年公布された文部省訓令第12号は、おしなべてわが国におけるキリスト教主義学校に対して致命的な影響を与えるものであった。学校教育において宗教教育が正課として認められなくなることは、宗教的な儀式も限りなく制限されることは、キリスト教主義諸学校における教育の根幹となる立学の精神を放棄することを意味した。建学の理念なきところで、キリスト教の精神に基づく人格教育の理想をいかにして実践することができようか。しかし、当時のわが国における歴史観、倫理・道徳のとらえ方は、キリスト教主義教育を標榜する諸学校にとって到底受け入れがたい流れであった。流れに逆らえば当然苛酷な試練を覚悟させざるを得ない時代状況であった。時の流れに妥協して学校の運営を継続するか、闘いを放棄して閉校の道を辿るか、当時キリスト教主義学校は、多かれ少なかれこうした二者択一を迫られたのである。国家主義、復古主義思想が時代の趨勢を決めつけつつある中で、このような閉塞状況は鳥取英和女学校の場合も決して例外ではありえなかった。

（ii）経済的困難と教師不足と

鳥取教会がそうであったように、鳥取英和女学校の場合も、基本的には独立採算による経営が目指されていたはずである。前述したように、英和女学校の場合、毎年入学する生徒の数は、教科内容を充足させるための教員の質的、量的必要を満たすにはほど遠いのが実体であった。教育の尊い理想を実現させるために、時々の教師たちは、文字通り日夜粉骨砕身で闘った。それらの教師たちの祈りは、宣教師文書に残された数々の資金援助へのアピールにも、顕著に表れている。中でもデントンのボードへの手紙は、当時の英和女学校の財的窮状と井伊校長はじめ教師たちの思いが、切々と訴えられているようで感銘深いものがある。

「……10年間も自分の財産を学校経営のために捧げてきた教会員たちの克己心について理解してほしいのです。その一人、女学校の校長の井伊氏は、俸給を受け取ることなく、少女達の運ぶお米で生活し、自分自身の身も心も学校に捧げているのです。」¹⁷⁾

鳥取英和女学校の閉校は1902年のことである。校長の井伊牧師はその翌年鳥取教会を辞し、兵庫県の西但教会牧師として転任。さらに2カ所の教会で牧会に当たったが、その後休職して二度と牧会に復職することはないまま、1938年11月、東京で永眠、享年75歳であった。彼は鳥取で生まれ、故郷の地での牧会に献身し、同時に鳥取英和女学校における教育の業に全力投球した牧師であった。その志はあまりにも尊いがゆえに、彼の名は鳥取の教会史、教育史の中にこれからも永遠に残されることであろう。

閉校後、在校の生徒たちの多くは、公立学校へと編入、上級生たちは京都の学校（同志社女学校のことか）へと向かった。同志社女学校には5名の生徒が受け入れられたようである¹⁸⁾。

（iii）鳥取英和女学校の精神を引き継いだもの

前述のように、鳥取英和女学校の跡地には、間もなくして鳥取孤児院が開設された。閉校後4年目にして、次のステップとして、ある意味においては教育活動の延長線上に福祉への新しい取り組みが始まったのである。鳥取英和女学校も鳥取孤児院も、あくまで教会を母体とするキリスト教信仰の一つの証しと

して展開していることに注目しておきたい。単に狭義の意味での宣教活動やキリスト教の布教活動に限定するのではなく、これを土台として時代へとメッセージを語り継ぎ、実践する姿勢こそ、鳥取の地におけるキリスト教の土着化を可能にするものであった。

同じ1906年には、鳥取幼稚園（現・愛真幼稚園）が開設されたが、その基礎はバートレット夫人が約40名の幼児を宣教師館に集めて始めた「プレイ・スクール」によって据えられたものであった。これが鳥取県における幼児教育の濫觴となったことは言を俟たない。

鳥取英語夜学校は、1917年11月の開設になる。定員は50名であった。1924年のミッション報告書では、入学者は120名を得た、とある¹⁹⁾。さらに1930年には、「南窓館」が開設され、これが地域におけるカルチャーセンター的な役割を担うことになった。5年後の1935年には、鳥取洋裁学校も開設されている。初年度の入学人数は35名であった、と記録にある。²⁰⁾

結びに代えて

鳥取英和女学校の歴史は、わずかに15年の短期間に終わった。この学校に在籍した生徒の数の総計は、500余名。この生徒数をもって少ないとするのか、これだけ多くの生徒がこの地でよく集まったものだとして評価するのか、判断は分かれるであろう。しかし、明治期のある重要な歴史の一区切りにこの学校に学んだ若き人々、この学校の聖業に関わった牧師や宣教師、教師たちの祈りが実を結ばなかったと決めつけるのは、早計に過ぎるであろう。人々はこの学校の教育のために祈り、闘い、身を粉にして働いた。生徒たちも、これらの人々の祈りに応えて真剣に、かつ誠実に学び、社会に巣立ってそれぞれの分野において縦横に活躍した。それらの人々の足跡が、具体的にどのようなものであったのか、それらを一つ一つ実証的に明らかにすることが、次に残された課題である。

この講演は、同志社女子大学資料室第15回企画展示「同志社スピリットと女性たち～医療・幼児教育・矯風の世界への飛翔」に伴い、2010年1月13日（水）午後5時から、本学今出川キャンパス・ジェームズ館207教室（J 207）において、公開講演会として行われた。

注

- 1) 『神戸女学院百年史・各論』（神戸女学院百年史編纂委員会編 1981）145頁。
- 2) 『ミス・デントン—同志社の宝と呼ばれた女性の60年』（F. B. クラップ著 同志社女子大学・同志社同窓会訳 2007）60頁。
- 3) 『信 望 愛（鳥取教会百年史Ⅱ 各論・資料編）』（日本基督教団鳥取教会百年史編纂委員会編 1998）263頁。『ミッション・ニュース』は、アメリカン・ボードやウーマンズ・ボードから日本に派遣されていた宣教師たちの報告書集“Japan Mission News”のこと。拠点は神戸にあった。
- 4) 『鳥取教会百年史Ⅰ 通史・感話編』（日本基督教団鳥取教会百年史編纂委員会編 1990）71頁。
- 5) 『神戸女学院百年史・各論』144頁以下を参照。
- 6) 『鳥取教会百年史Ⅰ 通史・感話編』72頁。ちなみに教会創立の前年春には受洗会員数120名とある。
- 7) 『信 望 愛（鳥取教会百年史Ⅱ 各論・資料編）』266頁。
- 8) 同書 266頁。
- 9) 同書 279～280頁の引用を転用。
- 10) 『神戸女学院百年史・各論』119頁参照。
- 11) 『信 望 愛（鳥取教会百年史Ⅱ 各論・資料編）』267頁。
- 12) 『創設期の同志社～卒業生たちの回顧録』（同志社社史資料室編 1986）402頁。

なお、この一文の筆者を、本書にも「明治25年女学校本科卒・田中（竹内）竹」としている。この書は、その「はじめに」に明記されているように、「松浦政泰が『同志社ローマンス』（警醒社、1918）を編纂執筆するために収集した資料」の、同志社大学図書館に保存されてあったものを編集、翻刻したものである。その『同志社ローマンス』には、「田口竹子（健吉夫人）」とか、「田口（健吉）夫人竹子」と書かれている。

『期報』によれば、本科明治25（1892）年卒の「竹内たけ（多計、竹）」は、卒業後母校で「舎監補助」として勤務する一方、同窓会書記を勤めていたが、1896年「田口健吉氏ト結婚」（第5号 15頁）し、以後「田口たけ」として同誌にしばしば登場しており、「田中」は「田口」の誤りと考えられる。ただし、現行の『同窓会名簿』（1996年）には1892年本科卒業生として「田中（竹内）たけ」を載せており、「田口（竹内）たけ」の名は見えない。
- 13) 『同志社女学校期報』（同志社女学校同窓会編）第3号（1895年1月）44頁。以下、引用文中の漢字は旧字体から新字体に置き換え、適宜に句読点を補った。
- 14) 同書 44頁。
- 15) 同書 43～44頁。
- 16) 『ミス・デントン』（デントン記念誌編纂委員会編 同志社同窓会 1953）D26-27。

- 17) 『信 望 愛（鳥取教会百年史Ⅱ 各論・資料編）』282頁。ウーマンズ・ボードの機関誌“Life and Light for Women”1901年6月号所載の報告書。
- 18) 『ミス・デントン—同志社の宝と呼ばれた女性の60年』59頁。
- 19) 『信 望 愛（鳥取教会百年史Ⅱ 各論・資料編）』284-285頁。この『ミッション報告書』は、前述の“Japan Mission News”のことだが、号数は不詳。1917年12月発行の『基督教世界』には、初年度の募集定員50名に対して、締切日にはすでに100名の応募者を得、60名が入学を許可された、と報じられている。その後、年々応募者、入学者数は増加している。
- 20) 同書 285頁。

講 師 略 歴

近藤 十郎（コンドウ ジュウロウ）

1943年福島県郡山市生まれ。1966年新潟大学人文学部人文科学科英文学専攻卒業。
1969年同志社大学大学院神学研究科修了。1971年ユニオン神学校（ニューヨーク）
にて旧約聖書神学を専攻修了（S. T. M.）。

日本キリスト教団膳所教会伝道師（1969～1970年）、飢肥教会牧師（1971～1975年）、
鳥取教会牧師（1975～1980年、第12代）。同志社女子大学専任講師、助教授、教授
（1980～2008年）。その間、学生部長、短期大学部長、現代社会学部長、宗教部長
等の役職を歴任。

1988～1989年イエール大学神学部にて在外研究、B. S. チャイルズ教授の下で旧
約聖書神学を学ぶ。2008年定年退職、現在同志社女子大学名誉教授。

著書：光華女子大学真宗文化研究所編『宗教の相貌～民族と宗教を考える～』（共著）
2006

訳書：B. S. チャイルズ『出エジプト記：批判的神学的注解』上巻及び下巻 日本
キリスト教団出版局 1994～1995

R. シャロック『ジョン・バニヤン』（共訳）ヨルダン社 1997

本講演は、著者の日本キリスト教団鳥取教会第12代牧師としての経験を踏まえ、
鳥取教会史における鳥取英和女学校の歴史的な意味について、同志社とりわけ同志
社女学校との関わりを意識しつつ些かの検証を試みたものである。尚、本稿は当日
の講演内容を話し言葉から書き言葉に改めている。

鳥取英和女学校と同志社

（同志社女子大学史料室講演会記録 2）

講 師：近 藤 十 郎

編 集：同志社女子大学史料室

発行日：2011年3月18日

発 行：同志社女子大学

〒602-0893 京都市上京区寺町通今出川西

TEL 075-251-4200

FAX 075-251-4201

e-mail : shiryo-i@dw.doshisha.ac.jp

印 刷：(有)木村桂文社

